ナボコフのーダース／*Nabokov's Dozen*（1958）／ウラジミール・ナボコフ（中西秀男訳）／サンリオ（文庫・9／10刊・¥380）

「ランス」は、遠い宇宙に飛び去った息子を待つ老いた両親の姿を、一人称の〝ぼく〟が見つめるという作品。「時間と引き潮」は、二十一世紀に生きる主人公（やはり〝ぼく〟）が、過去を回想する物語である。

なるほど、SFだ――と思われても、一向にかまわないのだが、しかし、いかにもブラッドベリあたりの書きそうな、「ランス」のような物語でも、その視点は明らかに違っている。

例えば、長編『アーダ』が、（あえてSF用語を使うならば）パラレル・ワールドのアメリカを舞台にしながら、彼流のペダントリーを、その主眼としているように、風景や事物、人物の動きの中に、ナボコフの描こうとしたものがあるようだ。

本書には、十三編の短編が収録されている。この短編集からは、遠いロシアを思うノスタルジア、叙情や幻想等、ナボコフの世界が充分感じとれる。ナボコフには、『アーダ』など、よほど親しんでいなければ、読み通せない作品もある。けれども、本書は比較的平易なものが多い。訳者も言っているが、ナボコフ入門書として最適ではないか。（後）